

OCSY-2

わくわくする遊びを通してつながることの大切さ ～遊びの環境を通して、子どもと保護者が保育者や地域とつながる ことで途切れのない支援を行うことの大切さについて～

羽地 知香

沖縄女子短期大学

【はじめに】

健診後の事後教室の保育士を担当し、様々な親子と出会ってきた。子どもの発達段階や保護者の状況によって支援を行ってきた。その実践を基盤にし、子どもと保育士との信頼関係、保育士同士のつながり、地域の次のライフステージへのつながぎを考えていきたい。

【1、療育で培う子どもと保育士との信頼関係】

療育に通う子どもの苦手な事の1つは、人との関係性の構築である。「この大人と一緒にいたい。遊びたい。」「この大人のそばにいたら他の友達も受け入れられる。」との思いが生まれ、縦の関係性が安定してくるからこそ広がるのが横の世界だ。遊びを充実し、生活の質をあげ、子どもが自分の力でできた喜びを味わうために環境を整えていく。過程では、子どもとの信頼関係が必要不可欠である。療育ではとにかくシンプルで繰り返しのある遊びや、体や心が満足する感覚的な遊びを通して信頼関係を深め笑顔を増やす。そうすると自然に大人同士もつながってくる。保護者が子どもの笑顔を見て安心する。こんな素敵な所がわが子にはあるのだと感じる安心であってほしい。

【2、保育士同士のつながり（療育から地域の保育所へ）】

健診事後教室や療育の保育士を担当していると、専門職とのつながりや役割分担（協働と分業）、の重要性を感じる。親子を教室に迎え、そこで様々な専門性を活かして支援を行っていく。その中で保育士は、緊張した子どもや保護者の心を和らげ、安心の場所や人を作る。保護者は、「この子の親でよかった。」子育ての孤独感をなくすことも役割だと思う。保育士は遊びを通して発達支援や保護者支援を実践していくのである。大切なのは、保育者同士がつながる事だ。同じ支援の保育士、地域の保育所の保育士がつながる事で、共通点生まれ、切れ目のない支援につながっていく。支援する子どもがいる場所の保育者同士が協力し、子どもを真ん中に置いてそれぞれの支援の環境を共通認識する事が質の高い保育につながっていくのである。

【3、地域の次のライフステージへのつながぎ】

保育士は、一人で抱え込まない事が大切だ。支援者も仲間を作りたい。保育・療育から教育へ、「私だけでやらねば」「自分が成長させなければ」と思い過ぎるよりも、私が担当した時はこんな姿だった、次の方には次の支援をしっかりとお願いすること。また、自分ができる支援とは違う方向から、他職種の方にも支援をしてもらえようつなぎの支援を考えることが、移行支援では重要に思う。

【まとめ】

療育の保育士として実践で目指したのは、子どもが主体的に遊びに参加したいと思える気持ちを育てることと、その姿を次の支援の場につなげることであった。自分が担当している時間だけで課題を一人で解決しようとしても支援はとぎれてしまう。専門職がそれぞれの専門性を尊重して子どもとその家族を中心に置き、次のステージの支援者につなげていくことが大切だ。

暮らす地域によって支援を受けられない事があってはいけない。子どもの素敵な所、家族の様子、地域課題をふまえて支援をしていく。支援をしていると信頼関係づくりに時間がかかり、心が折れそうになったこともある。そんな時に私を支えたものは、遊んだ後の子どもの笑顔とその姿を見て嬉しそうに笑ったり泣いたりする保護者の姿だ。そこには、支援をするために意見を交わした支援者の仲間もいた。療育に関わる者が、信頼し合い「楽しい」と思える小さな瞬間を積み重ねていく事が大切と考える。